監修：かなくらレディスクリニック
院長 金倉洋一
日本東洋医学会指導医
漢方専門医

漢方の話

「漢方」の基本的な概念は、疾患や患者に対する考え方が西洋医学の概念とは異なる。
Vol.1より順に「漢方」の基本的な概念について簡単にご紹介する。

漢方医学と西洋医学について

西洋医学では患者の局所的な症状を中心に診断し治療を行うのに対し、漢方医学では患者の全体像（総合的）を観察し治療を行う。現代の保険医療制度では漢方処方も病名投与になっているため、漢方本来の治療が西洋医学的な投薬と同様に取り扱われ、うまく活かされていない点も生じている。

では漢方医学とはどういったものなのか。

漢方医学では患者の自覚症状を重視したうえに、身体全体を観察し治療を行う。漢方処方を患者自身の体質やバックグラウンド、病勢を考慮に入れた上で決定するため、一つの症状だけで処方を決めない事が特徴である。

例えば風邪の場合、葛根湯がよく用いられているが、葛根湯が常に風邪に対して最適な処方であるとは限らない。風邪に対する処方でも漢方では数十種類存在する。それらを処方する際に必要な漢方特有の概念である『証』については、今後説明していく。

裏面に簡易な風邪に対する漢方処方の一部を記載した。よりよい効果を期待するためには最適な処方の鑑別が大事であることが少しでも理解していただければありがたい。

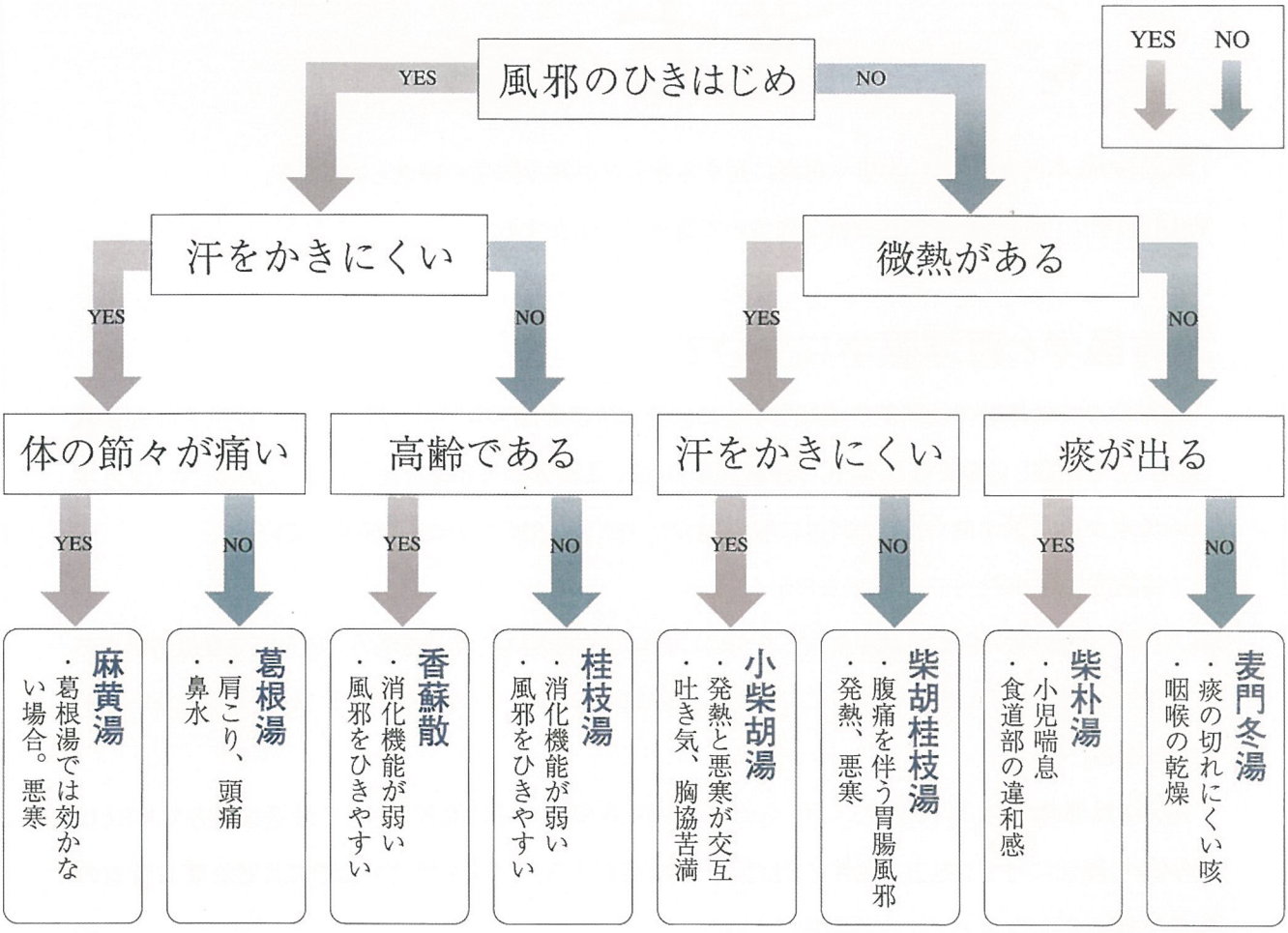
つまり、患者一人一人の『証』に合わせた治療を行うことが漢方医学最大の特徴であり、同じ疾患であっても患者によって、また病勢によって漢方処方が異なることに注目していただきたい。

漢方医学の基礎概念

漢方医学には疾患という言葉は存在しない。疾患の代わりとして『証』というとらえ方で成立してきた。漢方医学では、陰陽、虚実、表裏、寒熱、気血水、五行説、六病位、という考え方をもとにして『証』を決定する。漢方医学において『証』とは処方であり、西洋医学の投薬とは考え方が異なる。

つまり、『証』の概念を理解することが漢方を理解するうえで大事なことである。

漢方処方診断　風邪



▶漢方処方解説①

風邪に対する漢方処方は、初期症状、中期症状、後期症状かで異なる。

初期症状（頭痛・悪寒など）に対しては、自然発汗の有無が鑑別の際に重要である。汗をかいていない患者の場合は葛根湯や麻黄湯がよく用いられる。両処方は体力の充実した患者に適している。虚弱な場合や老人に対してはあまり用いられない。汗をかいている場合や胃腸機能の低下している場合は桂枝湯や香蘇散がよく用いられる。また、最近の話題として麻黄湯がインフルエンザに有効であるとの報告が多い。他にも鼻症状が強い場合は小青龍湯や葛根湯加川芎辛夷を用いる（水様性の鼻水の場合は小青龍湯、粘性の鼻水の場合は葛根湯加川芎辛夷が用いられる）。最近、小青龍湯は風邪だけでなく、アレルギー性鼻炎や花粉症などにも広く用いられている。

中期症状（悪寒、発熱、胃腸症状など）に対しては、柴胡剤がよく用いられる。柴胡剤の代表的処方が小柴胡湯である。身体が弱く腹痛がある場合は柴胡桂枝湯や柴胡桂枝乾姜湯を用いる。咳がひどく粘性の痰がからむ場合、小柴胡湯と麻杏甘石湯を合方することもある。空咳がみられる場合には麦門冬湯を用いる。

後期症状（回復期）に対しては易疲労、倦怠感などに対して回復促進のために補中益気湯などの温補剤を用いると良い。